

坂本龍馬と自分を重ねた者は僕の知る限り、必ず失敗している。僕はどうかであろうか。彼女はどうかであろうか。

坂本龍馬は誕生日と暗殺された日が同じである。生まれた朝、雨が降っていたという。殺された夜も雨が降っていたという。そのような話を聞いた事がある。事の真偽はもうわからない。既に近江屋事件を知る者はないから。

高校三年生の僕が彼女に会った日も雨だった。坂本龍馬の誕生日から半年と一ヶ月近く前の話になる。桜が咲き誇っていた四月十三日。

やや肌寒い風と、強くはないが傘をささなければいけないほどの雨が降っていた。雨の音が国道の車の音と相まって、耳ざわりだった。

道の脇には明るい桃色に咲き誇る桜の木。空は暗い灰色。午前十一時を回ったばかりというのに、街灯がついていた。水たまりには踏まれて汚くなった花びらが浮いていた。

高三の春を迎えた男子高校生の僕は憂鬱な帰り道を歩いていた。憂鬱の理由は、桜を散らす雨と、翌日からの補修の連絡であった。手には靴とドラッグストアの袋を持っていた。

始業式の翌日に、受験を意識した実力テストがあった。七十点に達しなかった科目は新学期早々補修だ。とてもシビアである。

日本史が苦手な僕は、社会が七十点に達しなかったのである。

家族から頼まれていた掃除用具を買いにドラッグストアへ行ったが、気分は変わらなかった。暗い青の傘を差し、ゆっくりと家に向かっていった。交通量が多く、なかなか信号の変わらない交差点を避けて歩道橋を歩いていた。

非常に大回りなルートとなる歩道橋を利用する人は少なく、階段の辺りは建物の陰になってじめじめとした場所になっていた。

人が倒れていた。歩道橋の階段を降りようと下を見た時だった。否、階段を降りた所に誰かが倒れていた。この距離からでは男か女か、年齢もはっきりとわからない。クリーム色のジャケットにジーンズという格好だった。

僕は野次馬のように、興味本位で下へ駆け降りようとした。内心、心が躍っていた。だが、後悔した。雨で滑りやすくなっていたのだ。傘と靴で手がふさがっていた。

頭上で何かが弾けるような音と、血が上るような感覚と、鼻の奥に水が入ったような頭の痛み。視界は早送りのようになって回っていた。

気づけば僕はその横に倒れていた。人が倒れていた。

背中に打ちつける雨が冷たかった。

「大丈夫？」

左側から声を掛けられた。掠れそうな声だった。しかし高く、美しい声だと思った。

顔は左を向いていたため、声の主が見えた。髪は肩ぐらいまでである。顔立ちからして女であるう。

「お前こそ大丈夫か？」

尋ね返す僕の声も視界も掠れてきていた。

「行き倒れ」

非常時に滑稽な会話である。

僕と彼女との間に赤い水たまりが出来ていた。否、血だまりが出来ていた。僕の方から流れた赤い液体が雨と混ざり合っていた。

「ちよつと、もらう」

視界から色が徐々に奪われていく。モノクロに近づくのではなく、アナログテレビの砂嵐のようなものが薄くちらついていた。

視界の中で、彼女は真っ赤な水たまりに顔をつけた。

*

木でできた天井と吊り下げられた蛍光灯が、まず目に入った。これは僕の部屋の天井ではない。一時期通った保健室のものでもない。襖や障子で仕切られた部屋だ。僕は見知らぬ和室で目が覚めた。

厚い布団を掛けられ、暑かったのである。かなり汗をかいていた。真っ白の敷布団も濡れていた。

「起きた？」

聞き覚えのある声だった。よく通りそうな高い声。それでありながら耳を劈くようなものではなく、優しく、妖しく語りかけるような声だった。

歩道橋の下で倒れていた彼女であった。

Tシャツにジーンズというラフな格好をしていた。非常に整った顔立ちをしていた。まつ毛が弧の輪郭をはっきりと描き、鼻は高いとはいえないが美しく伸び、口元は苺のような、どこか懐かしい気のある顔立ち。何故かはわからないが、彼女に懐かしさを感じる。

全体の雰囲気から、僕と同じ程の歳に見えた。

「ここはどこだ？」

「私の家」

普通、人が倒れていた場合、救急車を呼ぶべきである。しかし、彼女は自室に連れ帰った。物語の中ではよく見かけるパターンであるが、現実的に考えてありえない話である。中学二年の頃、友人とその事について三時間議論した末に出た結論は「それをするのは変態紳士」という理解し難い結論となってしまった。

「あの時、俺と一緒に倒れていたよな？」

「うん、あなたの血を貰ってお腹はある程度満たしたから」

「血で腹を満たす？ 何ですかそれ。えっと名前は……」

「南田晴」

「えっと、南田さんは血を飲んで腹を満たしたと？ 吸血鬼じゃあるまいし」

「よくわかったね。そう、吸血鬼」

その回答に、鼻で笑いながらも、脳裏では薄れる意識の中で僕の流れる血に舌をつける様子がイメージで補われつつ蘇ってきていた。僕の血を嘗めていた。ゆっくりと、味わうように。

まず感じたのは、蛞蝓のような湿っぽい気味の悪さだった。鳥肌が立ち、逃げ出したいという衝動と、非日常的ファンタジーへの興奮で胸は高鳴っていた。

妙に納得がいった。自室へ連れ帰るのも当然かもしれない。

「ところで名前は？」

名前を尋ねたから尋ね返された。動揺が表情に出ない様、僕の名前を答えた。

「坂本龍馬と一文字違いか。なんか惜しいなあ」

それを言われるとあまり気分は良くない。だから日本史をつい避けてしまうのであろう。

「知ってる？ 坂本龍馬は誕生日と命日が一緒で、どっちも雨だったらしいよ」

「知らない。日本史嫌いだから」

「何で？ おもしろいのに。特に幕末とか明治とか。近江屋事件の日にあの辺りで新撰組が――」

彼女は近江屋事件当日の京都の様子を語り始めた。

小学六年生の秋から冬に変わるような時期、歴史の授業で坂本龍馬の話が出た。クラスメイトは「名前一文字違いでこうも違うのか」と僕をからかった。そのような些細なきっかけで、三年と少しの悪夢が始まった。相手は悪ふざけのつもりだったであろう。当時通っていた少年野球のチームにも広がり、憧れだった背番号9番も捨てた。

それだけに留まらず、当時憧れであった女子に嘘の告白をされた。晴によく似た女子だった。些細な事と周囲は言うが、僕にとってはトラウマだ。思い出すだけで、吐き気がして、今にも発狂しそうになる。

「坂本龍馬と一文字違いなのが原因でいじめられたからだ」

「悪い事聞いちゃったかな。じゃあ世界史の話でもしようか」

「待て、それよりもなんでそんな話を自分の目で見えたかのように話すんだ？」

理由など、わかっている。

「見たからだよ」

「吸血鬼は不老不死だからとか言うのか？」

彼女は僕の血を飲んでいた。だから間違いないであろう。

「そうだって何回言ったらわかるの？」

「じゃあ証明してみろよ」

その言葉に対し、彼女は僕の頭を指した。触ってみると、髪の毛がある。それだけだった。怪我が無かった。

「吸血鬼の血を掛ければ怪我を治せるから」

ふと、吸血鬼の特性を思い出した。大蒜、十字架、銀が弱点であるということだ。

ドラッグストアの袋から、トイレ用消臭スプレーを取り出し、彼女に向けて噴射した。スプレー缶には「Agで消臭」と書かれていた。

薄く銀の混ざった白い霧がスプレーから吐き出され、晴の顔を覆った。

「きゃあ！」

甲高い悲鳴が聞こえた。噴射を止めると、晴の顔が傷だらけになっていた。口から血を吐きだしながら陸に上げられた魚のように跳ね、のた打ち回った。

「おい、大丈夫か？」

*

しばらくして、彼女の動きが落ち着いた。しかし、床に倒れたままで、息は荒かった。痛々しい顔の傷は徐々に癒えていった。

彼女を僕が先程まで寝かされていた布団に寝かせた。

「銀のスプレーなんて最悪……。毒ガスよりひどいよ」

顔の下の辺りまで布団を被り、目のみを出して話していた。

「すまない」

「折角綺麗な顔になったんですから」

この発言の意味を理解することができなかった。意味を問うた。

「基本的に吸血鬼は気に入った異性の血を吸うから、その相手の理想の異性象にルックスを合わせるって感じかな」

吸血鬼である事を証明されたにも拘らず、気味の悪さは小さくなり、先程とは違う高鳴りを感じていた。しかし、中学時代の恋の相手が頭を過り、言いようのない恐怖を覚えた。

「ところでさ、吸血鬼って正体バラして大丈夫なのか？」

「私さ、人と吸血鬼を結び付ける懸け橋になりたいんだ。薩長を結びつけた坂本龍馬みたいに」

「夢のある話というより夢物語だな。というか、また坂本龍馬かよ。ごり押ししたらハマると思うな」

それと同時に綺麗だ、と感じた。

「歴史は面白いって。龍馬君、受験生でしょ？ これからうちに来たら教えてあげる」

僕はその後一年間、晴に日本史を教えてもらい、受験戦争を勝ち残った。

*

「少し、血を分けてくれない？ 吸いきらないから。吸いきらなかったら変化しないから」

大学のオリエンテーション期間が終わった四月十三日。僕は春の部屋にいた。空は暗く、雨が窓を叩いていた。

「好き」

それは破滅のワードであった。僕の闇の奥底から、忌々しい記憶を掘り起こす。

晴の胸には鉄の杭が刺さっていた。まだ浅いのか、心臓には届いていない。ゆっくりとゾンビのようなゆっくりと、バランスの悪い歩き方で僕の方へ迫ってきていた。

吸血鬼狩りを専門としている奴に襲われた、と彼女は言っていた。彼女の思想を嫌っての事の様だ。

「龍馬君のこと、好きだよ」

死に掛かった状態で告白するなど、テレビドラマの中のみであるのだと思っていた。

僕は彼女の事を愛おしく思っているはずだ。しかし、湧き上がるのは恐怖と、そこに混ざる黒々としたものだった。恐怖は僕を震えさせる。

僕は逃げた。ただ、逃げ出した。

家に付いた時、消臭スプレーの空き缶を握っていた事に気が付いた。